■大宅壮一　　評論家。戦前「人物評論」で挫折，復興後，「無思想人宣言」を発表，辛辣な評論や流行語を発し，″マスコミ大将″に。
おおやそういち
ﾋﾟｱﾉ国産化・1900＝　　大阪府三島郡富田村(高槻市)で，醤油屋大宅八雄・トクの三男に生まれる。

放蕩・道楽激しくも人望厚い名士の父と神経質な母のもとに育ち，

日露戦争終・1905＝ 5歳：

伊藤博文暗殺1909＝ 9歳：
兄も放蕩だったことから，家業を専ら担っていたが，

明治天皇没・1912＝12歳：小学校高等科へ進学した頃から，盛んに文芸作品の投稿を始め，

21ヶ条要求・1915＝15歳：親と相談せずに茨木中学校に入学，社会問題に目覚めて家業の再興という路線を捨て，日記をつけるうち，
_学校・天皇制などへの疑問や賀川豊彦と出会ったことなどから，
ロシア革命・1917＝17歳：**_心的革命を得，**
本格政党内閣1918＝18歳：父が死去。米騒動に際して民衆蜂起支持演説を行い，放校処分になるが，
ﾍﾞﾙｻｲﾕ条約・1919＝19歳：専検に合格して第三高等学校に入学。
この頃，賀川豊彦の家に出入りし，
原敬首相暗殺1921＝21歳：川崎造船所ストライキを指揮する賀川の伝令役をつとめ，
水平社結成・1922＝22歳：結婚。卒業して東京帝国大学社会学科に入学，赤貧の中，英語講師などをして凌ぎ，
関東大震災・1923＝23歳：離婚し再婚するも，のち妻は病没。
護憲三派圧勝1924＝24歳：**_東京帝大在学中，日本フェビアン協会の創立に参加，主事に就任。**
治安維持法・1925＝25歳：**_大学を中退して，社会主義的文芸評論家として評論活動を開始，新潮社の「社会問題講座」を編集を担当。**
円本時代始・1926＝26歳：**＊「文壇ギルドの解体期」を発表してデビューし，**
金融恐慌・・1927＝27歳：**_翻訳で印税を得ると，土地を購入して家を新築，多くの文士らと交流する一方，**
_翻訳を″流れ作業式″に行う総合翻訳団を組織して，
世界恐慌・・1929＝29歳：**_全訳「千夜一夜物語」を刊行。**
海軍軍縮条約1930＝30歳：「文学的戦術論」，
満州事変・・1931＝31歳：三度目の結婚後，次々と子供が誕生して，ようやく家庭的に定着。{文芸時代}に「出口王仁三郎訪問記」。
盛んに引っ越しをするようになるとともに，次第に社会主義を離れ，
国際連盟脱退1933＝33歳：**＊旺盛な批評精神を体言{人物評論}を創刊するも，翌年には廃刊せざるを得なくなり，言論・表現の自由が封殺されてゆく時代の象徴にもなった。**
芥川直木賞始1935＝35歳：この頃から，大陸，南方を転々とする。
二二六事件・1936＝36歳：
日中戦争始・1937＝37歳：従軍記者にもなり，南京攻略戦を取材。

_<戦時体制>下にも，著作を次々と刊行する一方，映画関係などで軍部にも協力するが，
日米開戦・・1941＝41歳：海軍宣伝班としてジャワ作戦に配属される。

創価学会検挙1943＝43歳：**_何とか帰国すると，筆を断って農業をする。**

敗戦・・・・1945＝45歳：戦後は**_猿取哲のペンネームで執筆を再開，**

朝鮮戦争始・1950＝50歳：三遊亭歌笑と対談するが，直後に歌笑がGHQのジープにはねられて死去。
独立回復・・1951＝51歳：

自衛隊発足・1954＝54歳：
55年体制始・1955＝55歳：**＊「無思想人宣言」を発表してマスコミと一体となった新たな人生を歩み出し，**
_以後，中立，脱イデオロギーの立場から社会評論，人物評論を展開。ものごとの本質に直截に迫る辛辣，明快な分析を特色とし，
なべ底不況・1957＝57歳：{ノンフィクション・クラブ}を結成したり，**_″一億総白痴化″はじめ，**
_″駅弁大学″″恐妻″″ロコミ″″太陽族″などの新語をつくる。
美智子妃・・1959＝59歳：沖縄で差別的発言をして問題になったりしながら，
安保闘争・・1960＝60歳：
_放送，新聞，雑誌の寵児となり″マスコミ大将″の異名をとる。
TV宇宙中継始1963＝63歳：
東京ｵﾘﾝﾋﾟｯｸ 1964＝64歳：肥満とダイエットで体調を崩して長期連載が中断する一方，**_自伝「炎は流れる」を著し，**
大学紛争始・1965＝65歳：{中央公論}に「出口王仁三郎と大本教弾圧事件」。**_菊池寛賞を受賞するが，**
いざなぎ景気1966＝66歳：**_長男が死去して精神的打撃を受け，**
美濃部都知事1967＝67歳：**_後進を育成すべく{東京マスコミ塾}を開講し，**

＊著作も続けるものの，心身の疲労が甚だしく，
大阪万博・・1970＝70歳：**_没した。**

蒼洋社「大宅壮一読本(全集別巻)」，「この人どんな人」，「没年日本史人物事典」，平凡社百科事典，山田風太郎「人間臨終図巻」，「目でみる日本人物百科」，